

L 国語問題

注意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒のシャープペンシルで記入することになっています。
黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。
なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきらずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①
○ 1
○ 2
● 3
○ 4
○ 5

(3と解答する場合)

※ 大問一については著作権の関係により掲載できません。
引用した文章は次の通りです。

・大問一 倉橋由美子『坂口安吾論』

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点、送り仮名、句読点を省いたところがある。
 (解答はすべて解答题用紙に書くこと)

既^ニ托^{スルニ}以^{テス}死^ヲ生^ヲ。必^ズ当^ル一^ニ信^ス其^ノ言^ヲ不^レ生^ス疑^ム惑^ス。如^ク是^ノ靈^ヲ矣。是^レ則^チ誠^ニ之^ノ感^ニ應^ズ也。若^シ或^ハ弥^ヲ日^ヲ經^テ久^ク未^ダ得^ズ効^ヲ驗^ヲ欲^ス請^フ他^ノ医^ヲ亦^ズ当^ル能^ク与^テ前^ノ医^ノ謀^リ使^シ之^ヲ拳^ニ其^ノ所^ヲ知^ル而^{シテ}与^テ共^ニ虚^ニ心^ヲ商^シ議^ス可^ク也。如^ク是^ノ而^{シテ}無^ク効^ヲ則^チ命^ヲ也。非^ズ可^ク疑^ム惑^ス不^レ然^ラ衆^ノ医^ノ群^ニ議^ス紛^ニ錯^シ不^レ決^セ如^ク築^ク室^ヲ于^テ道^ニ則^チ竟^シ是^レ無^ク益^ヲ耳。

(佐藤一斎『言志晩録』による)

(注)

- 1 感孚——真心から感じ合うこと。
- 2 弥日経久——長い時間が経過する。
- 3 商議——話し合う。
- 4 紛錯——ごたごたとこみいる。
- 5 築室于道——家を建てることについて道行く人々をつかまえては相談する。

問

(A) ——— 線部(1)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 くだらない仕事
- 2 多くの人の願望
- 3 あらゆる無意味な計画
- 4 すべての事柄
- 5 ありあまるほどの希望

(B) ——— 線部(2)を書き下し文にしたものとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 必ず一いっに其の言の生ぜざるを信ずるに当りあたて疑惑す。
- 2 必ず当まに一いっに其の言を信じて疑惑を生ぜざるべし。
- 3 必ず一つひとつに当りあたて其の言の疑惑を生ぜざるを信ず。
- 4 必ず当まに一いったび其の言を信じて生まれながら疑惑せざるべし。
- 5 必ず当まに一つひとつを信ずべくして其の言に疑惑を生ぜず。

(C) ——— 線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 薬も不思議な効き目を現すだろう。
- 2 薬にも人の魂が宿ることだろう。
- 3 薬で超能力をも手に入れられるだろう。
- 4 薬の処方も自由自在に行えるだろう。
- 5 薬の選択も診断も確実になるだろう。

(D) ——— 線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 患者はたくみに前の医者进行問詰、前の医者が隠していた本当の病状を話させた上で、その内容を踏ま

えて後の医者と患者本人とで今後の治療方針を立て直すといよ。

2 患者は十分に前の医者と計画を練り、後の医者がどの程度の知識を持っているかを見極めてもらった上で、後の医者との向き合い方について相談するとよい。

3 患者は十分に前の医者に相談し、前の医者を知っていることを話してもらった上で、後の医者といっしょに公平に検討して治療の引き継ぎを行うようにさせたらよい。

4 患者は前の医者を入念に説得し、後の医者の心当たりを挙げてもらい、患者本人といっしょに客観的基準のもとで後の医者を選ばせるとよい。

5 患者はきちんと前の医者と話し合い、患者が誤解していることがあれば教えてもらった上で、後の医者とは協力しながら今後も治療を続けてもらうよう約束したらよい。

(E) ——— 線部(5)について。著者・佐藤一斎は、現在の教科書等で用いられているのは異なる独特の訓読法を用いた。この箇所にもともと付けられた返り点と、それに基づく書き下し文は次の通りである。

如_レ築_ニ室_于道

室_{しつ}を道_{みち}に築_{きつ}く如_{ごと}きは

ここに表れた佐藤一斎の訓読法の特徴として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 置き字を認めない。

2 原文にない漢字を補う。

3 助詞を補わない。

4 二点から一点に返り読みする。

5 漢字の訓読みを認めない。

(F) 本文の内容と合致するものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 確実な結論を得たいならば合議制がよい。

- 2 何事も相手を信頼することが大事である。
- 3 医者は患者と一心同体の存在なので治療できない病はない。
- 4 道行く人々に聞いたほうが、よい知恵が得られるものだ。
- 5 何があっても、かかりつけの医者を変えてはならない。

三 左の文章は、『夜の寢覚』の一節で、大納言が妻（北の方）との夫婦仲に嫌気がさしている場面から始まる。

大納言は、北の方の妹（中の君）との間に隠し子があり、結婚後も中の君への思慕が尽きない。一方、北の方は、噂話を耳にして二人の仲を疑っている。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答用紙に書くこと）

いと世の中うとましく、⁽¹⁾あぢきなくながめ入りたるを、^(注1)上は、^(注2)ただ心癖に見なしたまひて、^(注3)いみじく心やま
しかりければ、ゐざり出でて、「日に添へて、あらぬさまにおぼし移ろふ御気色こそ、ことわりぞやと思ふもの
から、見るたびに心動きはべれ。ただ心に任せて、あなたにおはしましたつきね。^(注3)一つ心に、誰もへだておぼすに、
なかなか心づきなさまさる」とのたまふを、「⁽²⁾言に出でて、なごて言ひなしたまふ」と思ふがにくければ、のど
やかに後目^(しりめ)にかけて見やりたれば、ものこまやかに、⁽³⁾なつかしく愛敬づきてこそあらぬさまなれど、きよげなる
御顔の、ものいみじく心やましかるべきまみ、いと赤くうつろひたるが、つねよりも、あなきよげと見ゆるは、
⁽⁴⁾さすがに目とどまりて、「何事を、いかにのたまふともこそ、心得はべらね。誰が申し知らせたることならむ。⁽⁵⁾う
たて聞きにくきことのみ、隙なく漏り聞こゆるものかな。我がためはさはれや、人の御ためは、いとほしくもお
ぼされぬか。男の好色^(注4)は、さも思ひ寄るべかりけることこそ、⁽⁶⁾なかなか思ひなりぬれ。聞きにくきことは、
いみじく人申すとも、よにあらじと、おぼしのどめてこそ、⁽⁷⁾見定めたまはめ」と、心恥づかしげにのたまふつれ
なさに、いとどものも言ひやらず、ほろほろと泣きたまひぬるを、「げに、いと若やかなる人の御上ならば、目
とまるまじきを、すこしすくよかに、もの遠く、^(注5)づしやかなる人の、⁽⁸⁾忍びあへず心弱げなるぞ、いかばかりおぼ
えたまふことならむ」と思ふに、いと罪得がましく、いとほしく、あはれになりて、⁽⁹⁾近くさし寄りて、いとなご
やかに^(a)うち慰めたまふ気色の、なまめかしくめでたきを、「まいて、さばかりなる気色に、心を尽くしてあはれ
と見せたまふらむを、⁽⁹⁾かの君もいかに思ふらむ」とのみおぼし寄るに、^(b)つゆも慰まず、いと妬きに、涙のみ流れ
まさりて、

⁽¹⁰⁾あま衣たちわかれなむと思ふにもなに人わろく落つる涙ぞ

とのたまふけはひなど、いと由々しく、心こころにくきさまに、これも、なべての人ひとには似にず、まさりたる御様なれば、いと心苦しうあはれにて、我も涙ぐまれて、「あが君や、など、かく冷ひやめやかに、つらき御心ぞ」と、うち泣きて、

かさねじと思ひたつともあま衣この世とのみも君を頼むか

(注) 1 上——北の方。

2 心癖に——疑いの目で見える習慣で。

3 一つ心に、誰もへだておぼすに——皆が示し合わせて、私をのけ者にお思いになるので。

4 男の好色は、さも思ひ寄るべかりけることと——私も男だから、なるほどそんなふうふうに浮気うきをしてもよかつたのだなあと。

5 づしやか——重々しく落ち着いたさま。

問

(A) ——線部(1)について。これは誰のどのような様子を表しているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 大納言の、あじけなく物思いにふけっている様子。

2 大納言の、北の方を苦々しくにらみつけている様子。

3 大納言の、風情のない和歌を詠じるしかない様子。

4 北の方の、やるせなくて涙の止まらない様子。

5 北の方の、大納言をぼんやり見つけている様子。

(B) ——線部(2)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 自分の口で、何でも良いのでご発言なさってください。

2 言葉に出して、なぜことさら言い立てなされるのか。

3 言うに事欠き、どうしてそんなひどいことをおっしゃるのか。

4 口から出まかせを言っても、何とかして取り繕い申し上げよう。

5 言い訳をして何とかごまかし申し上げることができらうか、いやできない。

(C) —— 線部(3)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 北の方にはかつてのような愛らしい様子は見る影もないが

2 北の方のかつての可愛いらしい様子がしみじみと思い出されるもの

3 北の方の大人びた美しさはこの世のものとは思えないほどであるが

4 北の方には親しみやすく魅力的であるといった様子こそないものの

5 北の方にもせめて愛しく感じさせる様子さえあれば良いのだが

(D) —— 線部(4)について、なぜそうなったのか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 大納言は浮気を指摘されてたじろいだが、うろたえる北の方を見ていたら心が落ち着いてきたから。

2 大納言は北の方に遠慮して非難を避けていたが、美貌を笠に着てわめく北の方にうんざりしたから。

3 大納言は北の方に後ろめたさを感じていたが、実は北の方も浮気をしていたことに気がついたから。

4 大納言は北の方に愛想を尽かしていたが、別れるほどでもないので何とか機嫌を取ろうとしたから。

5 大納言は北の方に不満を抱いていたが、怒って興奮した北の方の姿がいつもより美しく見えたから。

(E) —— 線部(5)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 気味悪く

2 不愉快に

3 しきりに

- 4 何となく
- 5 ますます

(F) ——— 線部(6)の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 しだいに
- 2 はつきり
- 3 ずいぶん
- 4 めったに
- 5 かえって

(G) ——— 線部(7)の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 北の方を辱める大納言の発言からはもはや愛が感じられないということ。
- 2 北の方のきまりが悪くなるほど大納言が平静さを保っているということ。
- 3 少し照れつつ浮気の言い訳をしている大納言がみつともないということ。
- 4 大納言が悪びれることなく中の君との浮気を正当化しているということ。
- 5 大納言の対応があまりに冷淡で北の方の悲壮感が増しているということ。

(H) ——— 線部(8)の理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 普段の様子と違って北の方が堪えきれず気弱になっているのは、よほどのことだと感じたから。
- 2 若い頃とは異なり健康不安のある北の方が、病弱さを盾にして泣きながら情に訴えてきたから。
- 3 北の方が浮気を非難すればするほど愛情が失せて、ますます中の君への思慕が募ってきたから。
- 4 北の方を泣かせたことで、妹である中の君からも悪い印象を持たれてしまうことを恐れたから。
- 5 噂を真に受けて騒ぐ北の方にうんざりしつつも、出家しようとしていると気づいて焦ったから。

(I) ~~~~~ 線部(a)~(c)について。文法的説明として最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、それぞれ番

号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 完了の助動詞「ぬ」の連用形

2 断定の助動詞「なり」の連用形

3 格助詞

4 接続助詞

5 形容動詞の活用語尾

6 ナ行変格活用動詞の一部

7 副詞の一部

(J) 線部(9)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 中の君も姉である私のことを何だと思っているのだろうか。

2 中の君も姉である私の幸せをどれだけ気にかけているだろうか。

3 中の君も大納言のことをどれほど愛しているのだろうか。

4 大納言も私たち姉妹のことを本当はどう思っているのだろうか。

5 大納言も中の君をどの程度愛しているのだろうか。

(K) 線部(10)の和歌の説明として適当でないものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 「たちわかれ」では、大納言との関係を断つ意味と僧衣を切り刻む意味を掛けている。

2 「なむ」は、完了の助動詞に意志の助動詞が接続して「くしてしまおう」の意を表している。

3 「人わろく」は、「外聞が悪い」の意で、感情があふれてしまう自身のみっともなさを表している。

4 「落つる」は、太行上二段活用動詞「落つ」の連体形で、「涙」を修飾している。

5 北の方は、出家すら考えているにもかかわらず、大納言への思いも捨てきれない葛藤を詠じている。

(L) 線部(11)の現代語訳を五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

- (M) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。
- イ 大納言が中の君を慕う姿を見ているくらいなら、中の君のもとに行ってほしいと北の方は訴えた。
 - ロ 大納言は、北の方の容姿を観察する余裕すらあつたものの、ついには気の毒になつて泣き出した。
 - ハ 大納言は、中の君と浮気していることを北の方に対して最後まで認めようとはしなかつた。
 - ニ 北の方は日ごろから大納言への愛情を隠していなかつたが、それが逆に大納言には負担であつた。
 - ホ 大納言は、北の方が自分を深く愛していることを知って、彼女とともに出家することを決意した。

【以下余白】